

## 好奇心を刺激する絵本の哲学性

古 市 久 子

愛知東邦大学

## 好奇心を刺激する絵本の哲学性

古 市 久 子

### 目 次

はじめに

I 仮説と方法

II ドラマ体験にみられる哲学性

III 「リズムする」ことの哲学性

IV こどもと哲学の関係

V こどもの好奇心と絵本

1 アーノルド・ローベル作“FrogとToad”のあらすじとポイント

2 小学生が読むアーノルド・ローベル作“FrogとToad”

VI こどもの好奇心を刺激する絵本の哲学性

1 こどもの何故に答える絵本

2 こどもの特性と絵本

3 ドラマを受け入れるこどもの心

4 リズムそのものを生きるこども時代

5 身体で「聞く」哲学と身体で「表現する」哲学

おわりに

### はじめに

筆者はかつて、絵本における哲学性について次のように検討した[1]。①哲学とこどもとの関係は深い、哲学は成熟と発達段階という概念には縛られない。②絵本と哲学については、こどもが自然に興味をもつ「哲学的な奇抜さ」がお話の中には含まれていることから、絵本がこどもに与える影響が大きい。③しかし、こどもが哲学をし続けることの困難さについては、おとなになるにつれて、科学によって信じ込まされた仮説に縛られて、哲学が生まれる条件である心の揺らぎがしぼんでいくこと。そして、こどもが抱える哲学的な問題について、永井均の『翔太と猫のインサントの夏休み 哲学的諸問題へのいざない』を参考にして絵本を分析し、6つの分類を行った。それらは、A 生きることについて、B 「善と悪」について、C 「客観的な基準」について、D 「心」について、E 「知ること」について、F 「自分」について、である。以上のようなことから、絵本はこどもたちに理解できるストーリーを通して心を刺激することが予測できるものであるし、絵本自体に、豊かな哲学性を秘めていることがわかった。

筆者の専門は身体表現である。身体表現を豊かに展開させる手法について、絵本との関係の深

さを検討してきた。表現する刺激や題材になるものとして、こどものイメージに大きな影響を与える絵本、その絵本が表現を喚起するものとしての価値を考えたいというのが、本論文の隠れた目的でもある。絵本といえども、こどもの心をつかむ要素がなくては、その影響力は少ない。しかし、たいていのこどもは絵本にひき付けられ、それはこどもの心に響き、表現はもとよりこれからの生き方にヒントを与えるものになるであろうことを述べたい。

## I 仮説と方法

そこで、好奇心を刺激する絵本の哲学性がどこに潜んでいるかを、次の3点から検討する。

- 1 知ることの楽しさ：質問期と呼ばれる幼児期は、何故に答えてもらうことが快い。絵本は図で感性に訴えるものが多く、かつテキストの量も少なく、知りたいことに簡単明瞭に応じてくれるので、こどもに大きな説明力をもつ。したがって絵本はこどもの心をひきつけ、知りたいという哲学的な行動を後押ししてくれる。
- 2 ドラマ性があることで生まれる哲学：絵本がもつ哲学性については、多くの哲学者が述べていることを、野間他（2002）が『絵本に見る哲学性』について、「生きること」「心」「知ること」などに分類してみた結果、生きるために自分に問うことにつながるものが豊かに含まれている（[1]のpp. 55-66）ことを確認した。つまり、絵本は豊かな体験を、絵と話で心情的になぞることができ、別の人生を生きることに一役をかつている。哲学者中村の「哲学とリズムの関係を説明するために使っているキーワード「好奇心とドラマの関係（[2]のpp. 17-19）」をもつ絵本は、魅力ある主人公、わかりやすい文章と展開、一目で理解できる絵で伝えられることで、ドラマとして訴える力をもっているのではないか。
- 3 絵本のもつリズム性が哲学につながる：こどもの特性と哲学の目的は近い。哲学者の中村（1999）は哲学とリズムの関係を述べていることは仮説2でも述べたが、リズムの世界に生きるこどもにとって、「哲学の究極の目的は生命のリズム（[2]のpp. 18-19）」とする中村の考え方はまさしく、こどもの「今」を表すものである。一方、絵本はリズムがあふれており、こどもの特性である「リズムする」時期に符号してその哲学性を高めている。

方法は小学2年生女兒にアーノルド・ローベル作『ふたりはいっしょ』を読んでもらい、その読後感想文を求めた。字数や形式は自由で、時間も自由である。次にマッシュューズの著書『哲学と子ども』『子どもは小さな哲学者』に書かれている『ふたりはいっしょ』の感想文と小学生のそれを比較する。一方、哲学者中村雄二郎の『哲学の五十年』に書かれている「ドラマ」「リズム」「好奇心」と哲学の関係を軸にしながら、ローベルの作品を通して、絵本の何が子どもの好奇心を刺激するのかについて検討する。

## II ドラマ体験にみられる哲学性

ここで、再度、中村の文章を引用する。「哲学とは好奇心であり、知ることへの情熱であ

る。……現実がつよくドラマ性をもっていればこそ物事を立ち入って考えるために、古代ギリシャにおいて哲学の発端が〈対話〉のかたちを取ったのであり、さらに、哲学の起源がギリシア悲劇にあったと言われるのである。ヘーゲルはギリシア悲劇やシェイクスピアの芝居を自己の高度に体系的な哲学的な考察の中で取り上げている。……そして〈哲学はドラマである〉ということによりよく示すためには、私たち人間が現実の中で行っている、物事についての立ち入った認識が〈行為・受苦・認識〉という諸段階を持っていることを明らかにすることがよいだろう（〔2〕のp.16）」と教えてくれる。心的に傷つきやすい特徴を持った人間が、受苦なくしては真の認識がないことを強調して、表面的でない認識を示そうとしたのである。

「哲学はドラマである」ことは中村のことばを待つまでもなく、生きることの命題を実感するのは心情を伴ったストーリーをもつ、一種のドラマ体験である。それは絵本の世界に多く見ることができる。生き方のある点でのこだわりや心の揺れが哲学的思考を生むことを考えれば、生きる躍動感そのままストーリーになり、ドラマに変換されていき、そこに、さまざまな哲学が生まれる。

こどもの話に注目しているマシューズは、「認識の発達を研究した、最初にしておそらく唯一の偉大な心理学者ピアジェが幼児の哲学的思考にたいして敏感でないとしたらいったいだが敏感なのだろう。…意外な答えかもしれないが、たいていの子どもはごく自然に哲学に興味をもつものだというを理解した、ほとんど唯一のおとなは童話作家である（〔3〕のp.101）」と述べているように、哲学者も子どもを対象とした話を作る人に目をつけている。絵本作家はドラマを端的に伝えること、たとえ話や動物を主人公にすることなど、こどもに興味を持たせる要素を知っている。その上、こどもが直接体験しているかのごとく具体的な表示をすること、一目で理解できるように図とテキストのバランスを考へることなどで話の世界に入り込ませて、こどもの好奇心を高めずにはおれない工夫をしている。そこにこどもの哲学が生まれる、言い換えると、こどもの思考が入り込むすきがいっぱい用意されている。

次々と提供される話であるが、嫌になるといつでも脱却できることも、こどもの負担を軽くする。絵本はドラマ性が高いが、おとなの話のように重くなく、簡単に手に入るものである。ドラマがあるところに哲学が生まれるとするならば、絵本は哲学が生まれる格好の場所である。

### Ⅲ 「リズムする」ことの哲学性

中村は「〈好奇心〉も〈ドラマ〉も人間の生命力の発現であることから、その生命力を探っていくて、〈リズム〉というものに突きあたる。生命の本質はリズムにあるからであるという。そして、これに関する哲学を超えた大胆な例を挙げている。ひとつはメキシコの詩人、オクタビオ・パスはわれわれが文化と呼ぶものはすべてリズムに根ざしているという言及である。もうひとつは、空海が地・水・火・風・空の自然の万物はみなリズムからなっている（〔2〕のp.17）」という。彼はそのことを、いろいろな分野の事象を取り上げて、確信を深めてきた。そして、それらを結びつけるものとして、次のような記述を引用したい。「《哲学は好奇心である》は哲学の個

人的なかかわりの次元の在り様を示すものであり、《哲学はドラマである》は哲学の人間的世界の次元での在り様を示すものであり、《哲学はリズムである》という命題は、哲学の宇宙的な次元での在り様を示している。そして、これら三つを貫いているものは生命的なものなのである（〔2〕のp.19）。こう考えると「リズムする」ことそのものが哲学性をもっていることになる。そして、自らがリズムを刻むことを余儀なくされるという運命にありながらも、ドラマをしたてていくことが哲学には必要なのである。

絵本はリズムにあふれている。それはこどもの心をとらえてはなさない。こどもがリズムの時期を生き、それを幼児教育界で当たり前のように受け入れてきたことは、これで納得がいく。こどもの世界、リズムの時期だけではない。前述の中村は、「表現として文章として生き生きしている」ことが、特に、思考にリズムを感じさせるか否かが哲学の文章の大きな分かれ目となる（〔2〕のp.18）」とまでいい、あらゆる表現活動への進展を示唆している。

絵本のリズム性は古市の「子どものリズムカルな身体表現の教育的意味：教材『ぐるんぱのようちえん』の検討より」に、絵本がいかにリズム性を大事にしているかを書いている。それらは「①リズムカルな言葉の楽しさがある。②動きを誘発するものである。③こどもの自発的な表現グルンドになっている。わかりやすく言えば、表現が自然にでてくるような流れがこどもの心に準備されるということである。④予想感・期待感ができる、⑤安心感がある、⑥リズム崩しを行うことにより意外性を準備できる。⑦社会的経験であり、リズムカルに一斉に行いながら、同期できている快感が個人に属することが教育的である〔4〕」としている。リズムカルであることから発する身体表現の意味が個人の教育的意味に帰するというところに、今回扱っている哲学性をより強く見ることができ。それは、こどもの哲学性について述べている哲学者（永井均 1996年『子どものための哲学』・中村雄二郎 1999年など）たちが取り上げている「客観的な基準」というキーワードからも導き出すことができる。『ぐるんぱのようちえん』をとりあげたのは、リズム的要素が幾重にもわかりやすく盛り込まれているからである。こどもの絵本がいかにリズムカルな要素を含んでいるかについてみると、『ぐるんぱのようちえん』のみならず、多くの絵本がこの手法をとっている。

繰り返しのある話は詳細をみると次のようなものに分けられる。①『ころころころ』『ぼぼぼぼぼ』のようなオノマトペで綴られるもの、②『できるかな?』のようにことばのリズムの繰り返しのあるもの、③『島ひきおに』『3びきのやぎのがらがらどん』のように場面の展開に繰り返しが見られるもの、④ことばのリズムとストーリーの両方が顕著な『大きなかぶ』『3匹のくま』、等である。これらの絵本はこどもが大好きであり、これらに共通するものはリズムの繰り返しである。

中村が「哲学はリズムである」と主張するのは、哲学が究極にめざすべきは生命のリズム、宇宙のリズムとの一体化（〔2〕のp.17）であると言うのは、哲学の宇宙的な次元でのつながりに気が付いたからである。そして、中村は「リズム」も「ドラマ」も人間の生命力の基本を求めるという考えから、好奇心、ドラマというキーワードで説明を展開しているのである。この提案につ

いて、こどもの世界では当たり前のように行われているリズムの世界が、こどもだけでなく、人の根源的な生命につながっていることが明確になった。

#### IV こどもと哲学の関係

マシューズの『哲学と子ども』では、まず、子どもという概念について、歴史的・文化的な問題を含んでいることが考えられることを指摘し、近代以前は子どもは単なる「小さな人」として認識されていたのが、そうではないことの観点で語られる。「子どもは哲学的であることは、詩とおなじように、哲学が新しさと独創性が最も評価される（〔5〕のp.26）」ということ、こどもから発する多くの奇抜な疑問や発想をあげて説明している。かれは、「3歳から7歳の子どもたちが、ごく自然に哲学の領域に足を踏み入れることは珍しいことではないという。・・・しかし、8・9歳ころになると、こうした現象は稀になるか、あるいはほとんど報告されなくなる（〔5〕のp.6）」といい、例をいくつも挙げている。それは「今後役にたつ」ことだけが価値があるという社会の要求にこたえてしぼんでいくことに課題があり、成長の過程における哲学的な問題を指摘している。

アメリカでは哲学は幼稚園から取り入れられ始めたマシューズが1994年に書いてからすでに17年経つ。その成果についてはどのようなものであったのだろうか。筆者はまだその結果についての資料を得ていない。

最近、哲学のこども版が多く出版されている。ここで2004-2005年にフランスで出版され、2006-2007年に日本で翻訳された「こどもの哲学」のシリーズを紹介しておく。全部で7巻あり、『よいこととわるいことって、なに?』『きもちって、なに?』『人生って、なに?』『いっしょに生きるって、なに?』『知るって、なに?』『自分って、なに?』『自由って、なに?』である。これらはいっしょに生きるって、なに?を考える本である。こどもたちの頭の中にあるいっばいの疑問、その疑問に様々な答えを用意して対話をしながら考えさせるという形をとっている。表1に、その内容についてまとめた。

『子どもの哲学』に書かれているこどもへの問は、対話形式にすることで、こどもの心に響く内容となっている。『よいこととわるいことって、なに?』は、子どもの話の中に溢れている。善は生涯に喜びをもたらす、悪は死や悪霊を呼び寄せる話は日本の昔話を流れる命題である。『きもちって、なに?』という問いかけは、創作絵本で年少児から年長児まで、日常の対話を扱った絵本で多く見ることができる。『人生って、なに?』『いっしょに生きるって、なに?』という難しそうな話も『はっぱのフレディ』『大きな木』のように葉っぱや木の一生を通して、生きるとは何かを知る[13] 絵本があり、死という問題も、自然にこどもたちの心に伝えていく[14]。『知るって、なに?』については単に図鑑的な知識を求めるだけでなく、質問期といわれる幼少期にはこどもが全身で知ることに向かうときに、こどもたちの目を輝かせる。絵本に心を寄せるのは、自分と本を読んでくれる人とのつながりに求めるだけではない。こどもの何故?を満足させてくれるという役割を果たす。『自分って、なに?』とおとなでも考えてしまうようなもので

表1 『こどもの哲学』（オスカー・プルニフィエ作）の内容 [6][7][8][9][10][11][12]

本のタイトル	作者	内容から一例をあげる 質問?→答え	その他に書かれていること
よいこととわるいこと って、なに?	オスカー・プルニフィエ文・西宮かおり 絵訳	ルール：おながへったらどろぼうしてもいいとおもう?→法律やルールが世の中でどんなに役立っているのか考えてみる	やさしさ・ききわけ・ことば・自由・おもいやり
きもちって、なに?	オスカー・プルニフィエ文・セルジュ・ブロック絵・西宮かおり訳	愛情のしるし：おとうさんとおかあさんがきみを愛してるって、どうしてわかる?→愛情の表し方は人それぞれ	やさしき・けんか・恋・ともだち・おくびょう
人生って、なに?	オスカー・プルニフィエ文・ジェローム・リュイエ絵・西宮かおり訳	しあわせ：しあわせっておもうのは、どんなとき?→ぼくはぼく、って思えるようになること	将来のゆめ・不幸・存在・人生の意味・死
いっしょに いきるって、なに?	オスカー・プルニフィエ文・フレデリック・ペナグリア絵・西宮かおり訳	ひとり：ひとりっきりで生きてゆきたい?→ひとりでじっくり自分と向きあってみること・人と人をつないでいるるんなぎずなをみつけること	そんちょう・意見・平等・しごと・リーダー
知るって、なに?	オスカー・プルニフィエ文・西宮かおり 絵訳	わかる：宇宙が存在しているって、どうしてわかるの?→知識を手に入れるためのいろんな方法をあたまのなかのひきだしにそろえておくこと	あたまをひねる・あたまに入れる・学校・考える・想像力
自分って、なに?	オスカー・プルニフィエ文・セルジュ・ブロック絵・西宮かおり訳	ちがい：きみは、みんなとおんなじ?→みんなの言うことに流されず、うわべのちがいを気にせずにひととつきあえるようになること	どうぶつ・成長・親・外見・自由
自由って、なに?	オスカー・プルニフィエ文・フレデリック・レベナ絵・西宮かおり訳	意志：したいこと、なんでもできる?→意志でどうにかなることとならないことを見きわめること	みんな・おとな・囚人・けんり・やくわり

も、絵本は印象に残る話で、テーマについて教えてくれる。“The Bear That Wasn’t”は、自分は熊だと思っているのに、この周囲の人に「お前は怠惰な人間であって熊ではないと言われ、悩んでしまう[15]話で、聞いたこどもも、自分が自分であることの証明が何かを考えてしまう。『オズの魔法使い』のような話もある。これは樵が生身の身体を全部ブリキに交換してもらおう[16]が、ブリキの樵は果たして最初の樵と同一人物かと考えてしまう。『自由って、なに?』についての絵本は『せかいでいちばんつよいくに』が面白い。規律に厳しい大きな国が、自由な気風の小さな国を征服しようとするが、気が付かないうちに小さな国の自由な雰囲気染まってしまっている[17]という話である。『樂園』は誰もいない何も無い島で暮らす男のもとに飛び込んだ一羽の鳥のさえずりがうるさくて追い出してしまう男、でもさびしくなってしまう[18]という話である

が、一人ぼっちは静かで自由に暮らすことができるが果たして幸せかということをごどもたちに考えさせてしまう。

ほんの少し例をあげたが、哲学的な思考は絵本の中に溢れている。そこで、これらの絵本やお話を読んで、ごどもたちは実際どのようなとらえ方をしているのかを見たい。

## V こどもの好奇心と絵本

### 1 アーノルド・ローベル作“FrogとToad”のあらすじとポイント

このシリーズについては筆者が初めて読んだときに、その哲学的なやり取りに、絵本の哲学性について例として使用しようと考えていたものである。二度目に出会ったのは、マッシュューズの著書で、この話に哲学的なジョークが含まれているとして取り上げられていたことである。ここで、“FrogとToad”の話をいくつか紹介する。

#### ① 『ふたりはともだち』[19][20]の中に収められている話から

「はるがきた」の中ではがまくんがちっともベッドから出てこず、翌年の5月になったら起こしてくれと言って寝てしまう。業をにやしたかえるくんが、4月までのカレンダーを破いて、5月にしてがまくんを起こすと、びっくりしてがまくんはベッドから起きだして、二人はなかよく散歩に行くというものである。ここで、興味をそそるところは、カレンダーががまくんの心まで変えてしまったことである。

#### ② 『ふたりはいっしょ』[21][22]の中に収められている話から

「よていひょう」は自分がたてた予定通りに実行するがまくん、その紙切れがとんでいってしまい、何もできなくなってしまう。生活は予定通りにいかないがまくんは、予定通りいかないことがまんできないという話。しかし、普通の人間生活では当たり前のことだとわかっている、今一度「それってなんだろう」と考えてしまう。

「はやくめをだせ」

かえるくんの庭を見て、がまくんもほしくなり、種をもらう。庭は「たいへん」だと聞いてその種を自分の庭にもらって帰り植える。そこで、植えた種に向かって大声で怒鳴ったり、詩を読んであげたり、音楽を聞かせたり大奮闘するがなかなか芽を出さない。疲れ果てたころ芽が出てきたのを見て、庭は「たいへん」という。「たいへん」の意味を取り違えているが、それぞれ考えが違うのに気がつかない。

「クッキー」

意志力とはなにか？クッキーをがまんするために、いろいろと工夫する二人、最後は鳥にクッキーをあげてしまいなくなる。いっぱい我慢をかさね、意志力ができたと言いつつもがまくんは悲しくなり、かえるくんに意志力を全部あげると言って、家に帰ってまたクッキーを焼きに行く。どの部分に意志力をおくのか、実に複雑な気持ちのありようを示している。

「こわくないやい」

自分たちに勇気があるかどうかを試すことにしたがまくんとかえるくん。色々と怖いことに挑戦しながらも進んでいくが、最後には家に走って帰って、家でベッドや押し入れの中に隠れてじっとしていた。こわいけれど挑戦した自分たちを勇気があると思ったことに、「えっ、勇気ってそういう意味だったの?」と考えてしまう。

「がまくんのゆめ」

がまくんは自分がかえるくんより優れている夢をみる。自分が舞台の上で何かを自慢するたびに観客席で見ているかえるくんがどんどん小さくなっていく夢。そしてとうとう見えなくなったところで、はっと、居てくれるだけで友だちのありがたさを知る。

③ 『ふたりはいつも』 [23][24]の中に収められている話から

「そりすべり」

冬の遊びをいやがるがまくん、櫓の上で、後ろに乗ってあげてすべりはじめたのはいいが途中で落ちてしまう。それに気づかないがまくんはかえるくんが後ろに乗っていてくれると信じて、すいすい滑っていく。ところが、からすくんに一人ぼっちだと教えられて、後ろにかえるくんがいないと知って自信を失いぶつかってしまう。

「おちば」

がまくんとかえるくんは、黙って互いに友だちの庭の落ち葉を掃除してあげる。いい気分で家に帰る途中で、大風が吹いて、庭は前よりもくちゃくちゃになってしまい、互いが家に帰ったときには落ち葉だらけになっている。お互いにキレにしてあげたことなど知らず、また、もとにもどったこともしらず、満足して寝る。知らないことはないことと同じであることを改めて思う話である。

④ 『二人はきょうも』 [25][26]の中に収められている話から

「あしたするよ」

がまくんはあしたのことを考えると憂鬱になる。洋服をきたり、お皿を洗ったりすることを一度にすればいいかと尋ねる。かえるくんにそうだと言われ、何もかも仕事をすまして、一番したいこと、つまり寝てしまう。怠惰の意味は一体何か、いつ寝てゆっくりするか、そのタイミングによって同じ行動でも意味が違ってくる。

「ひとりきり」

一人きりになりたいがまくんを探しに行ったかえるくん。でも、それは友だちがいて、自分がかえるで、この太陽の中に入っていると幸せを感じるための時間を持ちたかったことを知る。

“FrogとToad”の中に収められている話をいくつか紹介したが、あらすじを見ただけでも、このお話に含まれる哲学性を十分感じることができる。

## 2 小学生が読むアーノルド・ローベル作 “FrogとToad”

実際に小学生はどのようにこの絵本を読むのであろうか。シリーズ4冊のうち、『ふたりはい

っしょ』を選んだ。その理由は、内容が小学生にわかり易い話を多く含んでいること、哲学者マシューズが『子どもと哲学』にこれらの話のことを書いていて比較できることである。また、一冊にしたのは、小学2年生が、自分で興味を持って読めるように、量が多すぎて嫌にならないためである。その中には「よていひょう」「はやくめをだせ」「クッキー」「こわくないやい」「がまくんのゆめ」の5編がおさめられている。このうち最後の「がまくんのゆめ」については、感想文を書かなかった。理由は内容がよくわからないので書けないというものであった。方法はこの本を読んでもらい、自由に読後の感想文を書いてもらう。結果は以下のものである。また、現物は図にあげたように、小学生はときどきそのイメージを絵に描いている。

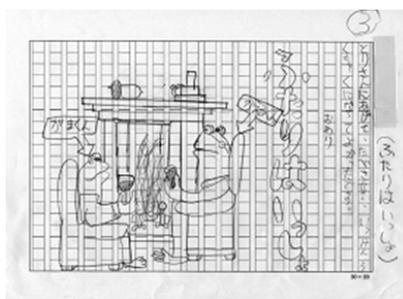
はじめに、予定表のお話です。がまくんは予定表を書いて、わたしは、予定どおりにできればいいなと思いました。だって、私も予定表かいて、予定どおりにならなかったからです。そして、かえるくんの家へ行って、いっしょにおさんぽ行って、予定表が風にとばされてけっきょくは、とばされてなくなってしまっかわいそうでした。でも、ねる時間だとかえるくんがいて、よてい表のおねんねをおもいだして、さいごはよていどおりできてよかったです。

次に、[はやくめを出せ]です。かえるくんの庭は本当にすごきれいでした。がまくんもきつとかえるくんみたいなにわがうらやましかつたんだなと思います。そこで、たねをまいて、「はやく目(芽)を出せ。」とっていたと思います。

そして、何日かたってたねのまいたところに行くと、まったく目(芽)がでていません。だからがまくんはうたったり本をよんだり詩をよんだり音楽をきかせたりしたんだと思います。

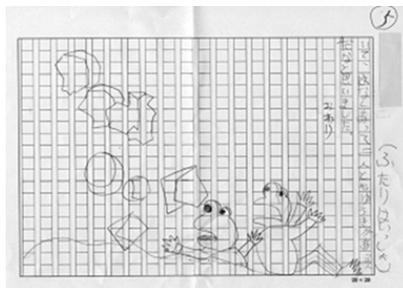
でも、目(芽)はでてきてなくて、がまくんはつかれてねむって、次の日になってかえるくんにおこしてもらってたねをまいたところをみると、目(芽)がでていてがまくんはおおよろこびして、よかったです。

次にクッキーのはなしです。がまくんがクッキーをつかって、かえるくんがたべて、おいしいとっていて、わたしもたべたくなりました。いつまでもたべていていいんしょく(いしりょくがいる)をしなきやといて



やろうと二人はきめたのに、できませんでした。

そこで、はこの中にとじこめました。でも、はこをあけるとたべれるといいしかたなく、ひもでしばってしまいました。それでも、ひもをほどけばたべれるといい、  
 かも、しかたなく、上においたら、そこからとればいいとがまくんがいい、どうしようもなかったから、とりさんに声をかけて、「おおい。とりくんたち。クッキーがあるよ！」と声をかけて、とりさんにあげて、たべさせて、いっけんらくちゃくしてよかったです。 おわり。



さいごに、「こわくないやい」とゆ（い）うおはなしです。お話は、どうして、りゅうやばけものとたたかっているのに、こわくないんだろうとわたしも思ったことがあります。それはゆうきがあるからです。かえるくんとがまくんは、自分たちには、ゆうきがあるのかと思い、ために山にのぼることにしました。

そして、しばらくすると、どうくつから、とてもでっかいへびがでてきて、おもわず、二人はびっくりしてにげようとしたけど、そお（う）すると、だめだから上にのぼりました。

その次に石がごろごろおちてきて、二人はにげようすると、だめだから、上にのぼりました。

そして、てっぺんにつくと、わたしは、よかったと思いました。するとたかがきて、二人をたべようと思いました。わたしはびっくりして、にげろと思いました。二人は、なだれがあったところへ、へびにあったところをすぎ、がまくんのいえまではしてやっとなつて、はなしあって二人ともゆうきがあるんだなと思いました。 おわり

以上の小学生の感想を、哲学者マッシュューズの記述、筆者の感想と対比させながら検討する（表2を参照）。

表2 アーノルド・ローベル著『ふたりはいっしょ』を読んだ感想

	子どもの感想	筆者の感想	マッシュューズの感想
Aよていひょう	予定どおりにできればいいと思う。私も予定表かいて、予定どおりにならなかったから。さいごはよていどおりできてよかった。	生活は予定とおりにいかないという話に、普通の人間生活では当たり前のことだと知る。	マッシュューズの2冊の本『哲学と子ども』『子どもは小さな哲学者』の中に「よていひょう」について書かれた箇所はない。
Bはやくめをだせ	がまくんはきつとかえるくんみたいなにわがうらやましかった。だからがまくんは本をよんだり音楽をきかせたりしたん	うまく育ててほしい一心で、自分なりの工夫をする発想が子どもらしくてほほえましい。「たいへん」の意味を取り違	この話がすぐに人をひきつけるのではなく、長い間、人々の心に残ることは確かだと断言できる。がまくんの心底からの純情さは人を感動させずにはおかない・・・このジョー

	だと思う。芽がでていてがまくんはおおよろこびして、よかった。	えているが、それぞれ考えが違うというところがおもしろい。	クは深遠である。歌や朗読が発芽に影響すると思う人がいないが、何故そう考えないのだろう（〔5〕のp. 159）
Cクッキー	二人はきめたのにできなかった。はこの中にとじこめ、ひもでしばり、とりさんにあげて、いっけんらくちゃくしてよかった。	クッキーをがまんするために工夫する二人、最後は意志力まで、かえるくんにあげて、自分はクッキーを作りに戻るということで「がまん」ということばに意味を持たせている矛盾がおもしろい。	意志の概念、そして、それに関連した意志力の概念はどちらも、われわれを苛立たせる厄介な問題である。苛立ちのいくつかには、決定論の考え方や、決定論は自由意志と両立しうるかという問題が絡んでいる。また、別の苛立ちには意志の弱さ、意志力の欠如といったことがからんでいる（〔3〕のp. 116）。
Dこわくないやい	りゅうやばけものたたかっているのに、なぜこわくないんだろう。それはゆうきがあるからだ。二人は、たくさんたたかって、がまくんのいえまではして、はなしあって二人ともゆうきがあるんだなと思った。	自分たちに勇気があるかどうかを怖がりながらも経験したことを勇気があると思うのはうなずける。家に帰って押し入れに隠れて震えるという、勇敢でない行為のギャップに哲学的思考が生まれそうである。	うれしくらいに奇抜なローベルの物語はその挑発的なユーモアを通して、私たちに勇気とはどういうものかを考えさせる。ある人間に勇気があるかどうか、見分けられるだろうか（〔3〕のp. 223）。最後の「ふたりとも、とても勇敢だと感じていた」という最終行は完璧なソクラテス反語を用いて、われわれに、何かしら重要なことを悟らせようとしている（〔5〕のp. 163）。
Eがまくんのゆめ	（この話は感想文を書かなかった）	がまくんは自分がかえるくんより優れている夢をみる。何かを自慢するたびに、かえるくんがどんどん小さくなっていくという高度な文章上のレトリックを使っている。	マッシュズの2冊の本『哲学と子ども』『子どもは小さな哲学者』の中に「がまくんのゆめ」について書かれた箇所はない。

A『よていひょう』では「予定どおりにできればいいなと思う」と書いた小学生は自分でもそういうことがあったと共感しているが、予定表の持つ意味に自分の心の焦りを感じていて、思い通りにいかないことのもやもや感があっても、最後には、予定通りいったことへの満足感から、自分の生きるやり方をユーモラスにひとつ学ぶことができたと思う。がまくんの気持ちになって、「予定通りになってよかった」という小学生の共感と、「予定なんて思い通りいかないものだ」ということを知っているおとなの間には人生の体験の違いが明らかに見える。

B「はやくめをだせ」では、小学生がいうように、「がまくんはきつとかえるくんみたいなにわがうらやましい」という気持ちもわかるし、もらった種に歌を歌ってあげたり詩を読んで聞かせたりという具体的な行為で、うらやましさを解消しようとするがまくんに、こどもなりに寄り添う気持ちがあることがわかる。マシューズの言う、どうして、芽に音楽を聞かせたり、詩を読んであげようと思う人がいないのかとの間に、新鮮さを感じるのは何故か。当たり前のことを不思議と考へて立ち返ることは、時々、我々にも必要な態度ではないかと考へる。なぜなら、周囲との関係が変わっても、相変わらず過去のやり方に無意識の内に従い、何の疑問ももたずに行動していることがままあるからである。

かえるくんの「たいへん」のこばの取り違えに笑ったり、ひとつのこばに多くの意味を含んで使い分けているおとなの哲学と、具体的なもので考へようとするこどもの違いがここでも見ることが出来る。この話を読んで、最後にがまくんに芽がでてきてよかったと思うと同時に、うらやましい気持ちを跳ね除けたいという希望を持ちつつ、我慢して良い結果を得たことを知り、我慢することの大事さを知ったことであろう。「たいへん」の意味を取り違えているが、いつかこの取り違えに気が付くときに、また、豊かな世界が広がるであろう。我々は日常使っているこばに、体験的な意味を与えている。哲学者のマシューズも日常用語の例として、「道徳的な・不道徳な・公平な・不公平な・正直な・嘘つきの・勇敢な・臆病な、などの言葉について、一つの典型的な例を思い浮かべられる ([5]のp.93)」ことに触れている。典型的な例を知ることと言葉のつながりはこどもにとって欠くことのできない体験である。特に、前述したあいまいな定義あるいは広義な意味をもつこばは、日常の具体的な表現につながってこそ意味をもつものであろう。絵本はそれを実に単純明快に他のものと切りはなして、わかりやすく教えてくれる。

こんな人がどこかにいれば、笑ってしまうところであるが、かえるくんは真剣であり、がまくんも優しさにあふれて、哲学的な見方の違いがユーモアを生み出している。ユーモアは最高の哲学的思考のスキップ現象ではないか。「この作家の真の特質は「でも かえるくん。きみのいうとおりでよ。とても たいへんな しごとだったよ」という最後の一行に表れているという。芽を出させるために音楽を聞かせたり詩を読むことと、科学的に証明することの間に哲学的思考の違いがあるが、早く芽をだせと大声でどなるので、芽は怖がっている。…がまくんの心底からの純情さは人を感動させずにはおかない」という詩人とも思えるマシューズのこばに哲学者の哲学者たる目に感動する。

マシューズの『子どもは小さな哲学者』で述べている次のような文章がこの解釈にあっている。それは朝食のときに早く学校にいくとか、学校におくれるということについて議論が起きたときに、そういう目に見えないもののために大騒ぎをすることに、6歳1ヶ月の子どもが「はやいおそいは形がはっきりしているものとは違うんだよと言ったことについて書いている。「テーブルとか、椅子とか、茶わんのように、形がはっきりしているものという概念は、哲学者が質量的対象 (material object) とか物理的対象 (physical object) と呼んでいる概念のことだと思われる。テーブルや椅子や茶わんは質量的対象であり、早いとかおそいとかはそうではない ([3]のp.32)。



についてある行為が行われたことを評価してしまう、つまり、こどもも哲学者も「いっけんらくちやく」と言い切ってしまう単純さも哲学性が豊かである証明であろう。

#### Dこわくないやい

「こわくないやい」は自分たちに勇気があるかどうかを試す話である。りゅうやばけものとたたかっているのに、なぜこわくないんだろうと思った小学生は「それはゆうきがあるからだ」と意味を考える。勇気の意味は難しいが、ここでは、勇気を試してみたい、抽象的なことばの意味を具体的に身体で形を与えたいこどもの特性が見える[27]。「りゅうやばけものとたたかうことでゆうきがある…おしいれに入ってふるえている二人がゆうきがある」という文章がそれをよく表している。このテーマの解釈が3人とも違うのは、哲学性が高い話の証明ではないか。

マシューズの『子どもは小さな哲学者』には次のような例が示される。「二人の子どもがぐるぐると追いかっこをしている。二人がいる場所がどこかによって、前か後ろが決まる。また、一人が追いかけているならもう一方のこどもは後ろにいますのであり、もう一人の子からにげているのであれば前にいることになる。相対的なことばの論理を研究した最初の人物はアリストテレスだが（『カテゴリー』論第七章）、こうしたことばに対する疑問はプラトンの思想においても重要な役割を演じた。十九世紀および二十世紀における倫理学の発達のおかげで、相対的なことばが生む疑問は、わたしたちにとってはるかに理解しやすいものとなった。しかし、だからといって、相対的なことばが生む疑問を遊びながら研究する楽しさが、少しでも減るわけではない（[3]のp. 30）」と、相対的な言葉への関心度の強さを書いている。

この話に出てくる「勇気」と言う言葉は実に興味深く相対的な場面をもたらす。怖いことにチャレンジするがまくんとかえるくん、そのことに勇気があると思う小学生の共感がある。しかし、おとなは帰ってから押入れて震えあがるがまくんやかえるくん、「それ勇気と違うよ」と心の中で叫びつつも、真面目に挑戦しそして震えて隠れる姿がいとおしくて、ひょっとすると勇敢かもしれないぞ、とってしまう。筆者が哲学的雰囲気強く感じとったのもこの話である。しかし、こどもたちの考えは違う。

マシューズが音楽学校の生徒たちに勇気ある人間になるためには何が必要かを尋ねた結果がある。「(1) 危険ではあるが、(2) ばかげていないことをしなければならない。勇敢であるため(3) 非常に重要な理由から行われるべきで、(4) 褒美めあてであってはならない。ただし、(5) 結果として褒美をもらえることはある。最後に(6) 恐怖におびえるかおびえないかは勇気のあるなしとはまったく関係ない、という点に全員が一致したという（[3]のpp. 224-225)」。実にのびやかで場面に即した分析であると感心すると同時に、既成の概念にすがろうとする筆者の反省をうながすものであった。

この絵本は私たちに勇気とはどういうものかを考えさせる。天敵ともいべき危険の数々に出会い、誰を倒すわけでもなく命からがら帰ってきて、本当に勇敢な気分ひたっている最終行は完璧なソクラテス反語を用いて、われわれに、何かしら重要なことを悟らせようとしている、と

いう哲学者ならではの感想ではあるが、われわれも哲学的な言葉が使えなくても、心では感じる  
ことができる。“ソクラテス反語”が無知を装って質問し、答える相手の無知を暴露するやり方  
だと知ること、また、新しいことばの発見として記憶に残る。

E「がまくんのゆめ」の話は感想文を書かなかった。これは意味が理解できなかったようである。  
また、哲学者マシューズもこの話に関心を示していないことの共通点がおもしろい。小学2年生  
はかえるくんが自信を無くしていく様子を、身体が縮んでいくことで表現したローベルの試みは  
すぐには理解できなかったようである。「がまくんは自分がかえるくんより優れている夢をみる。  
何かを自慢するたびに、かえるくんがどんどん小さくなっていく夢。そしてとうとう見えなくなっ  
たところで、友だちのありがたさを知る」ような体験はしていないし、また、勝ち負けのはっきり  
しないことに優劣をつける判断、すぐれたいという意味の深さや、人間の本性にまだ至ってい  
ない年齢なのであろう。ここでは、作者やおとなの思惑通りには子どもには伝わらないものがあ  
ることがわかる。

## VI こどもの好奇心を刺激する絵本の哲学性

哲学は心が揺らぐところに生ずる。絵本はこどもの心を揺らせる必要条件となる。心のゆらぎ  
は身体の内部から発し、内部から発した躍動感とは常時想起してくるものである。躍動感が連続す  
るとストーリーが生じる。ストーリーは人の記憶に残りドラマとして人の心を魅了し、やがてパ  
ターン化する。パターン化し無意識の内に反応するように身体が慣れてくると、好奇心をそそら  
れなくなる。ドラマが彼らの好奇心を掻き立て、躍動感が身体の中だけに収まりきらず、表現に  
まで進展するような子どもが体験するドラマも、同じように、だんだん日常化され、パターン化  
していく。

それに比して、絵本は次々と新しい情報を提供してくれる。それに絶えず接している子どもは  
常に哲学をしているといってもよい。そこで、本論文の目的である絵本が子どもの好奇心を刺激  
するのは、何故かについて、次の5点にまとめた。

### 1 子どもの何故に答える絵本

幼児期は質問期といわれるように、2歳頃から始まり、最初は「これなに」と事物の名称を  
尋ねる。3・4歳になると、「なぜ？ どうして？」と事象の意味や理由、因果関係を尋ねる。古  
市は『星の王子さま』が教えてくれた子どもの心』において、短い話の中で70回以上も質問を  
する王子さまの姿を取り出し、疑問や不条理性に対して、新鮮な目と耳をもっているのは子ども  
である[28]』ことを解説している。こどもの質問癖とそれに応える絵本は、子どもにとっておも  
ちゃであり、知識を得るものだけでなく、生活そのものである。

絵本が大切なものとして注目されるようになったのは、なにも近代に限ったことではない。  
「貝原益軒は『和俗童子訓』で『訓蒙図彙』を「世間通用の文字を知る」テキストとしてあげて  
いるし、江戸中期の漢詩人江村北海も天命3年（1783）刊『絵本故事談』『訓蒙図彙』『絵入庭

訓』『絵入節用集』などの絵本類を推奨した[29]。そして、絵本の効果を、こどもの習性は必ず絵解きを求めてくる、とこどもの好奇心や疑問こそ学習のチャンスだと考えていたのである。

時代や国を超えてこどもの「何故？」は尽きることがない。それに応え続ける豊かさを絵本は十分に備えている。

## 2 こどもの特性と絵本

「哲学は好奇心」であり、こどもは好奇心の塊である。絵本をみることは知識を得、感情を体験し、自分のもてる力で考え表現する時間をもつことである。我々が好奇心と呼ぶこどもの生活そのものは、決してなくなるものではなく、育ちに十分かつ必要な条件である。しかし、現実と違うのはこどもに恐怖を与えることはほとんどないということである。

絵本を読みながら、「良いか悪いか」「行くべきかいかざるべきか」を自分で自由に判断しながら、主人公と共に絵本の世界を生きる。絵本は安心して冒険できる場所である。わくわくしながら、心的体験を重ねながら、かつ、もうどうにもならないときは元に戻れるという安心感もある。だから、こどものこころは躍動し続け、嫌なときはいつでもリセットできることを知っているに違いない。その証拠に、怖い場面や嫌な場面は、人に読んでもらっているにもかかわらず、絵本を自分の手で閉じてしまったり、読んでもらうのを拒否することがしばしば見られる。

こどもは好奇心をどんどん膨らませて、空想の世界にも遊ぶことができる。こどもは絵本によって、自分とは別世界を生きる人でもある。『星の王子さま』には箱の中に羊を想像する場面にそれが実に上手く描かれている。大人に羊を描くようにせがんだ王子様は実物に似た絵は好まず、箱だけを書いてもらい、それを覗きながら満足する。それは箱の中に自分の想像する羊を見て[30]、空想できる楽しさを味わっているのである。

## 3 ドラマを受け入れるこどもの心

かえるくんとがまくんの話は三人三様の感想であった。しかし、3つの感想は三人とも、ドラマの焦点になっているのは同じ内容についてであり、作家の投げかけた哲学的命題でもある。小学2年生の作文からもわかるように、こどももおとなと同じところに心をひかれたというところに、人としての哲学的側面が十分に、いやそれ以上に備わっていることを見ることができる。別の見方をすれば人としての基本的な思いはどの年齢においても同じなのであろう。

「こどもの研究は主に二つの観点、一つは子どもの発達を成熟過程であるということで、成熟の完成という数値目標を持つ。第二の観点は成長が段階的に進むということである。人間の発達をこの2つから見ていくと、哲学的にいうとバイアスがかかる（[5]のp.25）」とマシューズが表現して、こどもが大人の哲学者に比べて劣っているかについて、疑問を呈している。発達に伴って教育化されていくたびに失われていく哲学的思考について、我々はあまりにも無防備だったのではあるまいか。哲学においては、詩と同じように、新さと独創性が最も評価されるということから考えると、全身で話の内容に驚きと疑問を呈しつつ、同時にそれを受け入れていくこども

の心の柔軟性がある。話の世界はいわば、空想であり、今ここで行われている行為ではない。どんなに世の中とかけ離れたことでも、例えば植物が話したり、豚が家を建てたりしても、受け入れて馬鹿にしないこどもは、おとな以上に哲学者になれる心を持っている。

#### 4 リズムそのものを生きるこども時代

絵本ではリズムがとても大切な要素であることはいまでもない。好奇心もドラマも、ともに、すぐれて人間の生命力の発現であるわけだが、その生命の根源を探っていくと、リズムになることもよく考えるとごく自然なことである。生命の本質はリズムにある。そして、哲学の究極はリズムにある。毎日の生活がリズムカルに繰り返され、その四季の変化が繰り返され、生の営みがなされる。まさしくリズムは生きる哲学をしていくことである。繰り返し生の営みが行われるからこそ、無意識の内に過去との違いや将来への疑問、そこに存在する人たちとのやりとりに心の揺れが生じることを考えるとそのことがよくわかる。リズムと生命の間には密接な関係があることを、気づかせてくれた哲学者中村に拍手を送りたい。リズムは生きることと同じなのである。今まで遠い存在であった哲学がいきなりそばに寄ってきた感じがする瞬間であった。

さらに、絵本がこどもに好かれるのは、リズムの時期を生きる生命の躍動感と共振するものがあるからであろう。マッシュズも中村もリズムを哲学の根源ととらえている。このことを、幼児教育に携わる者が認識することは大切である。なぜなら、こどもはリズムの中で生きリズムに合わせる快感に支えられて成長していくものだから、そのことを基に教育をすることができるからである。

また、概念の単純さを行える哲学性の豊かさこそ、高度のリズム化の能力であり、哲学の基礎的要因を備えていることがわかる。こどもも哲学者も単純化への志向ができることを“FrogとToad”の感想文の例で見てきたが、単純化はまた、いつでもどこへでもどのようにも発展できる可能性をもつ。

従来、幼児教育においては音楽と身体表現の共通基盤であるリズム教育が重要な課題であった。日本の幼児教育に大きな影響を与えた3つのリズム教育がある。もっとも大きなものとして、ダルクローズ（1865～1950年）が提唱したユーリトミックがある。彼は音楽のリズム感を良くするために身体教育を行った。その流れは現在も各国で引き継がれており、人間教育の基礎にもなると言われてきた。次はカール・オルフ（1865～1982年）のシュールベルクである。彼は音楽・言語・動きの完全な一体化を目指し、身体そのものを楽器と考えて手拍子や足拍子を取り入れた。三つ目はハンガリーのコダーイシステムで、自国のハンガリー語の民族音楽を教材とした（[4]のpp. 1-7）。これらのリズム教育が衰えることなく、ますます工夫されて受け継がれているのは、こどもたちのリズム感の発達に一致した教育方法が、こどもたちの心をとらえて離さないのであろう。教育的にはこどもの発達に寄与していると考えていたが、哲学的な意味、生命の躍動感や宇宙のリズムにまでつながっていたことを考えられたことは、今回の収穫といえよう。

## 5 身体で「聞く」哲学と身体で「表現する」哲学

「哲学は驚くことから始まる」とアリストテレスが『形而上学』でいい、ヴィトゲンシュタインは哲学の問題は『わたしは道に迷っています』という形をとる（〔3〕のp.13）とマッシュューズがその著『哲学と子ども』で述べているように、聞くことで驚き、そして疑念をもつことと深く結びついている。その結果、自分の体験を交えて表現し、周囲の反応に合わせて、その答えを出そうとする無意識の努力が哲学的思考を生む。

この項につけたタイトルは哲学者黒崎の『身体にきく哲学』の中の「身体に〈聞く〉哲学と身体に〈効く〉哲学（〔31〕のp.188）」の言葉にヒントを得て、本論文に馴染む文章「身体で「聞く」哲学と身体で「表現する」哲学」とした。絵本や読書の楽しみや経験は本来個人に帰するものであり、個人の身体で「聞く」ものである。しかし、「本を通してお互いを理解しあい、集団がまとまっていくことができるのです。百のお説教よりも、一冊の絵本の読み聞かせです〔32〕」と依田が気づかせてくれたように、絵本を通して集団の一人ひとりが理解をし、表現することを通して一つにまとめあげることでもできる。身体で「表現する」ことで、互いに他人が確認できるし、まとまりに向かう過程で個人の考え方が違うこともわかる。

こどもが絵本に接するとき「聞く」ことから「表現」する間に存在する哲学的思考が育ちに必要であるからこそ、こどもは絵本に描かれている世界にひかれる。黒崎は「現代のデジタルの眼と交通した身体が、「主体的な私を置き去りにしようとしているこの時代で、いま自分の身体に「聞く」というか、やってみたいこと、自分が何を求めているのか、この時代には何が自分の救いになるのか、自分を実験台、観察対象にして見ていくしかないのではないか。……わたしたちは、常に〈意味づけ〉を行いながら生きている生命体である。思索や深い洞察によって、そのつど見出される「意味」は私を生き生きとさせ、活性化させ、私を取り戻してくれる（〔31〕のpp.188-189）」と現代における身体と哲学の「意味」を教えてくれる。こどもの好奇心と絵本はまさしくこの関係と合い通じるものである。こどもの場合、そのことを無意識に瞬間にやっつける。哲学性を秘めた絵本、その絵本に刺激されて心が動くこども、絵本を身体で聞く、その楽しさやドラマを身体で表現する、この繰り返しにより、好奇心はますます膨らんでいく。

仮説として挙げた3つの疑問について整理しておく。仮説：「知ることの楽しさ」についてはこの項の1・2について検討した。仮説：「ドラマ性があることで生まれる哲学性」については、3で考察した。仮説：「絵本のもつリズム性が哲学につながる」は4で検証した。これらを総合して絵本のもつ哲学性が、こどもの好奇心を刺激し、好奇心を飽きさせずにこどもを魅了するという筆者の目的は達成された。

## おわりに

「アマチュア哲学者は哲学を論ずることに対して、アマチュアのテニス・プレーヤーがテニスに対して感じる以上のとまどいを感じる必要はない（〔3〕のp.146）」というマッシュューズの言葉に励まされて、この論文を最後まで書き上げた。絵本はこどもの好奇心をくすぐる。それはリズム

ミカルに生きるこどもの心を揺さぶるものであり、それが育ちを豊かに展開していく機会になっていることが確かめられた。絵本は大人と子どもをつなぐツールとしての価値は大変大きいですが、それだけではなく、絵本を読むことにより哲学性の高い子どもに寄り添うことで、おとなのかつて持っていた哲学性をもう一度思い起こし、おとなが子どもにつながっていたことを強く認識し、おとなの方が、子どもよりもすべての点で優るといふ偏見を見直すことが出来たことは本論文を書いた大きな収穫であった。

「哲学とは何よりもまず、好奇心と探究心に満ちた子どもの遊び場だ[33]」という、永井の『翔太とねこのインサイトの夏休み』の裏表紙に書かれた中島義道のことばを記してこの論文を終えたいと思う。

## 引用文献

- [1] 野間宏樹・古市久子『絵本に見る哲学性』大阪教育大学研究所報、No. 37、pp. 55-66. 2002年.
- [2] 中村雄二郎『哲学の五十年』青土社、1999年.
- [3] G. B. マシューズ著・鈴木明訳『子どもは小さな哲学者』新曜社、1996年.
- [4] 古市久子・川村晴子「子どものリズムカルな身体表現の教育的意味：教材『ぐるんぱのようちえん』の検討より」大阪教育大学教育研究所報、29巻、pp. 1-7、1994年.
- [5] G. B. マシューズ著・倉光修・梨本香歩訳『哲学と子ども』新曜社、1997年.
- [6] オスカー・プルニフィエ文・西宮かおり訳絵『こどもの哲学：よいこととわるいことって、なに？』朝日出版社、2006年.
- [7] オスカー・プルニフィエ文・セルジュ・ブロック絵・西宮かおり訳『こどもの哲学：きもちって、なに？』朝日出版社、2006年.
- [8] オスカー・プルニフィエ文・ジェローム・リュイエ絵・西宮かおり訳『こどもの哲学：人生って、なに？』朝日出版社、2006年.
- [9] オスカー・プルニフィエ文・フレデリック・ペナグリア絵・西宮かおり訳『こどもの哲学：いっしょに生きるって、なに？』朝日出版社、2006年.
- [10] オスカー・プルニフィエ文・西宮かおり訳絵『こどもの哲学：知るって、なに？』朝日出版社、2007年.
- [11] オスカー・プルニフィエ文・セルジュ・ブロック絵・西宮かおり訳『こどもの哲学：自分って、なに？』朝日出版社、2007年.
- [12] オスカー・プルニフィエ文・フレデリック・レベナ絵・西宮かおり訳『こどもの哲学：自由って、なに？』朝日出版社、2007年.
- [13] シェル・シルヴァスタイン作絵・ほんだきんいちろう訳『大きな木』篠崎書林、1976年.
- [14] レオ・バスカーリア作・島田光雄絵・みらいなな訳『葉っぱのフレディ』童話社、1988年.
- [15] Tashlin, Frank “The Bear That Wasn’t” Dover Publications, Inc, 1946年.
- [16] ライアン・フランク・ボーム作・ロバート・サブダ絵・わくはじめ訳『オズの魔法使い』、大日本絵画、2005年.
- [17] デビッド・マッキー作・なかがわちひろ訳『せかいでいちばんつよいくに』光村教育出版、2005年.
- [18] ニコラス・アラン作・いしいむつみ訳『楽園』BL出版、2000年.
- [19] アーノルド・ローベル作・三木卓訳『ふたりはともだち』文化出版局、1972年.
- [20] ArnoldLobel “Frog and Toad Are Friends” HarperCollinsPublishers, 1970.

- [21] アーノルド・ローベル作・三木卓訳『ふたりはいつしよ』文化出版局、1972年.
- [22] ArnoldLobel “Frog and Toad Together” HarperCollinnsPublishers, 1971.
- [23] アーノルド・ローベル作・三木卓訳『ふたりはいつも』文化出版局、1977年.
- [24] ArnoldLobel “Frog and Toad All Year” HarperCollinnsPublishers, 1976.
- [25] アーノルド・ローベル作・三木卓訳『ふたりはきょうも』文化出版局、1980年.
- [26] ArnoldLobel “Days With Frog and Toad” HarperCollinnsPublishers, 1979.
- [27] 正高信男『子どもはことばを体で覚える』中公新書、p. 149、2001年.
- [28] サン・テクジュベリ作・内藤濯訳『星の王子さま』岩波少年文庫、p. 15、1953年.
- [29] 小泉吉永『「江戸の子育て」読本—世界が驚いた！「読み・書き・そろばん」と「しつけ」』小学館、p. 70、2007年.
- [30] 古市久子『「星の王子さま」が教えてくれた子どもの心』大阪教育大学教育学研究所報、pp. 45-53、1998年.
- [31] 黒崎政男『身からだにきく哲学』NTT出版、2005年.
- [32] 依田逸夫「絵本がつなぐ子どもとおとな」アリス館、p. 21、2005年.
- [33] 永井均『翔太と猫のインサントの夏休み』ちくま学芸文庫、裏表紙、2007年.

受理日 平成23年9月20日